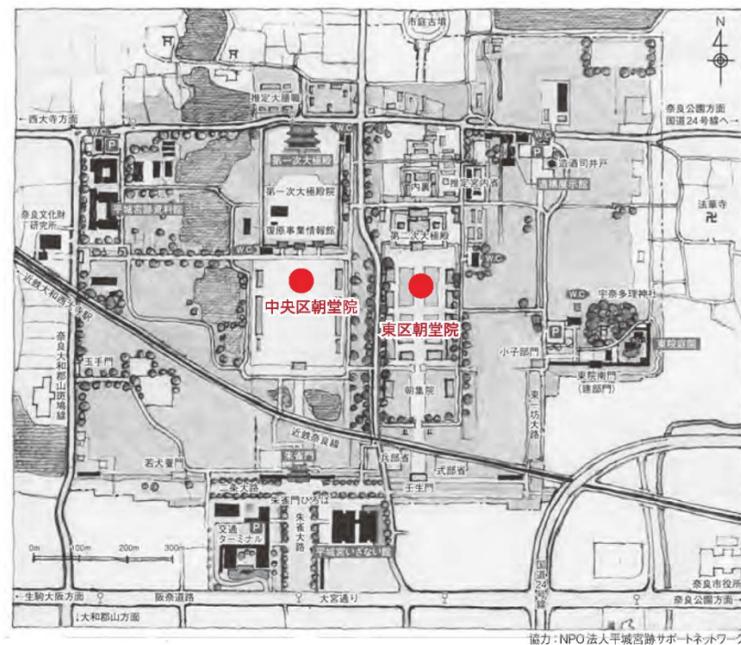


## 奈良時代の大嘗祭

年月日	天皇	悠紀国	主基国	『統日本紀』本文	発掘遺構からの推定位置
716年11月19日 (霊龜2年)	元正	遠江	但馬	辛卯、大嘗す。親王已下、及び百官人らに祿を賜うこと差あり。由機の遠江・須機の但馬国の郡司二人に位一階を進む。	東区朝堂院朝庭
724年11月23日 (神龜元年)	聖武	備前	播磨	己卯、大嘗す。備前国を由機とし、播磨国を須機とす。従五位下石上朝臣勝男・石上朝臣乙麻呂、従六位上石上朝臣諸男、従七位上榎井朝臣大嶋ら、内物部を率いて、神橋を斎宮の南北二門に立つ。	東区朝堂院朝庭
749年11月25日 (天平勝宝元年)	孝謙	因幡	美濃	乙卯、南薬園新宮において大嘗す。因幡をもって由機国とし、美濃を須機国とす。	— (平城宮外)
758年11月23日 (天平宝字2年)	淳仁	丹波	播磨	辛卯、乾政官院に御して、大嘗の事を行う。丹波国を由機とし、播磨国を須機とす。	東区朝堂院朝庭
765年11月22日カ (天平神護元年)	称徳	美濃	越前	癸酉、是より先、廢帝、既に淡路に遷る。天皇、重ねて万機に臨む。ここにおいて、更に大嘗の事を行う。美濃国をもって由機とし、越前国を須機とす。[実際の祭日は22日己卯カ]	中央区朝堂院朝庭
771年11月21日 (宝龜2年)	光仁	参河	因幡	癸卯、太政官院に御して、大嘗の事を行う。参河国を由機とし、因幡国を須機とす。参議従三位式部卿石上朝臣宅嗣・丹波守正五位上石上朝臣息嗣・勳旨少輔従五位上兼春官外亮石上朝臣家成・散位従七位上榎井朝臣種人、神橋棒を立つ。大和守従四位上大伴宿祢古慈・左大弁従四位上兼播磨守佐伯宿祢今毛人、門を開く。内蔵頭従四位下阿倍朝臣息道・助従五位下阿倍朝臣草麻呂、諸司宿待の名簿を奏す。右大臣大中臣朝臣清麻呂、神寿詞を奏す。弁官史、両国の献物を奏す。右大臣に絶六十疋を賜う。五位已上に衆人ごとに一領を賜う。	東区朝堂院朝庭
781年11月13日 (天応元年)	桓武	越前	備前	丁卯、太政官院に御して、大嘗の事を行う。越前国をもって由機とし、備前を須機とす。両国種種好の物を献る。土風歌舞を庭に奏す。五位已上に祿を賜うこと差あり。	東区朝堂院朝庭

## 奈良時代の大嘗宮遺構の発見と意義

平城宮跡で大嘗宮の遺構が見つかったことは、古代の宮廷儀礼を知るうえで画期的な発見といえます。大嘗祭は飛鳥時代から現代の令和まで脈々と継承されてきたものであり、古代の大嘗宮の実態を知るだけでなく、令和に至るまでの大嘗宮の変遷を解き明かす貴重な事例として注目されます。



大嘗宮の遺構の位置図

\*東区朝堂院では、大嘗宮の遺構を表示しています。

### 調査・整備に関わる年表

昭和 59 年度 (1984)	平城第 161・163 次調査 (東区朝堂院朝庭部の発掘)
昭和 60 年度 (1985)	平城第 169 次調査 (東区朝堂院朝庭部の発掘)
平成 2 年度 (1990)	平成の大嘗祭 (11月22・23日、皇居にて)
同年	東区朝堂院地区再整備 (光仁天皇大嘗宮の遺構表示)
平成 16 年 (2004)	平城第 367・376 次調査 (中央区朝堂院朝庭部の発掘)
平成 17 年 (2005)	平城第 389 次調査 (中央区朝堂院朝庭部の発掘)
令和元年 (2019)	令和の大嘗祭 (11月14・15日、皇居にて)

\*本リーフレットは、令和元年を記念して作成しました。

特別史跡 平城宮跡

## 大嘗宮

発行：2019年11月

独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町 2-9-1

TEL 0742-30-6753

FAX 0742-30-6750

HP <http://www.nabunken.jp>

# 大嘗宮

特別史跡

平城宮跡

## 大嘗祭・大嘗宮とは

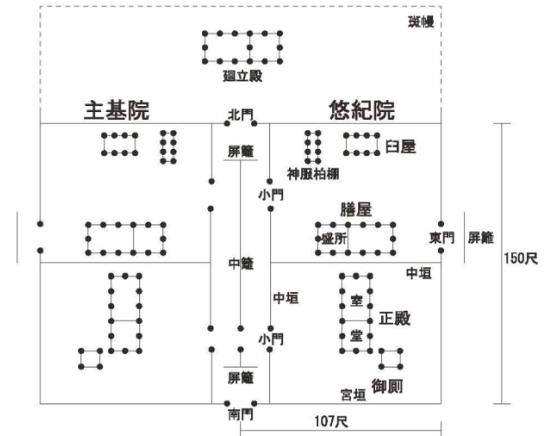
大嘗祭とは、天皇が即位後、初めておこなう新嘗祭のことです。新嘗祭とは、毎年11月下旬に五穀豊穡や国民・国家の安寧を祈願するためにおこなう収穫祭で、新米を炊いたご飯や新米でつくったお酒などを神々に供え、天皇自身もこれを飲食する祭儀です。

天皇就任の祭儀の一環としての大嘗祭は、一世一度の儀式です。飛鳥時代の天武天皇の頃に整えられたとされ、形を変えながらも今日まで継承されています。

大嘗祭では、通常の新嘗祭と異なり、臨時の祭場として「大嘗宮」を造営します。大嘗宮は祭儀終了後、直ちに取り壊される仮設の建物群です。

## 大嘗宮の建物配置

平安時代の儀式書である『儀式』や『延喜式』には、平安時代初期の大嘗宮について詳細に記載されています。それによると、東の悠紀院と西の主基院を東西対称に配置し、それぞれ南半部には南北棟の正殿と御厨が、北半部には祭儀に用いる稻を精白するための臼屋と、米を炊くための膳屋が置かれます。これらの建物は柴垣によって囲まれます。また、両院の北側には、天皇の控えの御座所および湯屋として用いられる廻立殿が設けられます。



『儀式』にみる大嘗宮の建物配置

## 平城宮跡でみつかった大嘗宮遺構

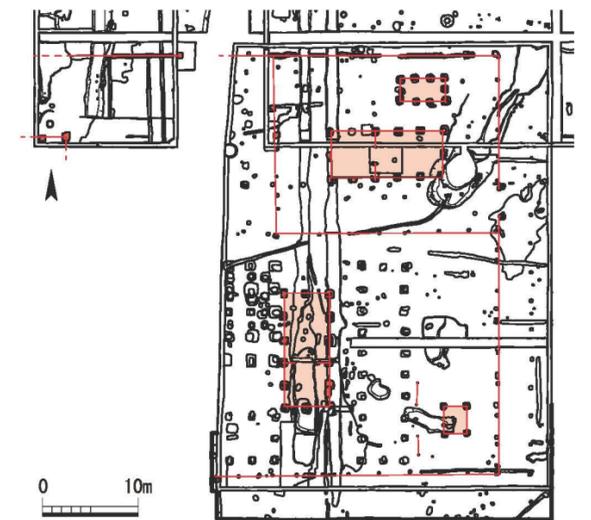
平城宮跡では、これまでの発掘調査により奈良時代の大嘗宮の遺構が合計6時期分、見つかっています。

東区朝堂院朝庭部では、1984・85年の発掘調査時に奈良時代後半の3時期分の遺構を検出し、その後の研究でさらに奈良時代前半の2時期分の遺構が存在することが判明しました。さらに中央区朝堂院朝庭部でも、2004年の発掘調査で、奈良時代後半の大嘗宮の遺構を1時期分、確認しました。いずれも東半の悠紀院に相当すると考えられます。



中央区朝堂院でみつかった大嘗宮の遺構(北から撮影)

奈良時代に即位した天皇は、元正・聖武・孝謙・淳仁・称徳・光仁・桓武の7代です。そのうち、孝謙天皇は、平城宮の外で大嘗祭をおこなったとみられます。したがって、平城宮跡で見つかった6時期分の遺構は、孝謙天皇をのぞく、6代の天皇の大嘗宮の遺構にあたる考えられます。



中央区朝堂院でみつかった大嘗宮の遺構平面図

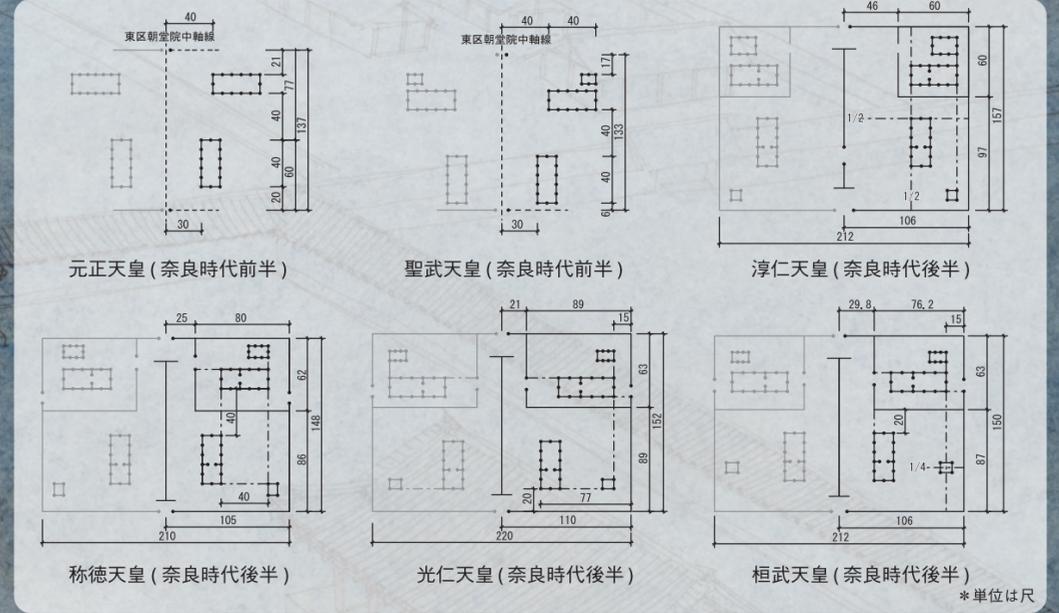
## 東区朝堂院の大嘗宮

東区朝堂院朝庭部では、発掘調査によって5時期分の大嘗宮(悠紀院)の遺構を検出し、時代が下るにつれ、大嘗宮の位置が北から南に移ったことがわかっています。

現在、当地には、発掘調査成果にもとづいて奈良時代後半の光仁天皇の即位(771年・宝亀2年)にともなう遺構を地表に表示しています。その区画の全体規模は、東西約65m、南北約45mで、正殿と御厩の南辺、御厩・膳屋・臼屋の東辺で柱筋がそろった計画的な建物配置となっています。

## 奈良時代の大嘗宮の変遷

発掘調査で確認された遺構の規模や配置から、大嘗宮全体の南北規模は奈良時代前半ではやや小さく、奈良時代後半からは概ね平安時代の『儀式』の規模に近づくことがわかります。また悠紀院の南半部は奈良時代を通じて区画はなく、『儀式』とは異なる特徴もみられます。加えて、尺の完数を用いて建物間の距離を設定したり、柱筋を揃えるなど、各建物の配置には奈良時代を通じて高い計画性がうかがえます。なお、平城宮跡では廻立殿跡と推定される遺構は十分に解明されておらず、その成立・定着については今後の検討課題です。



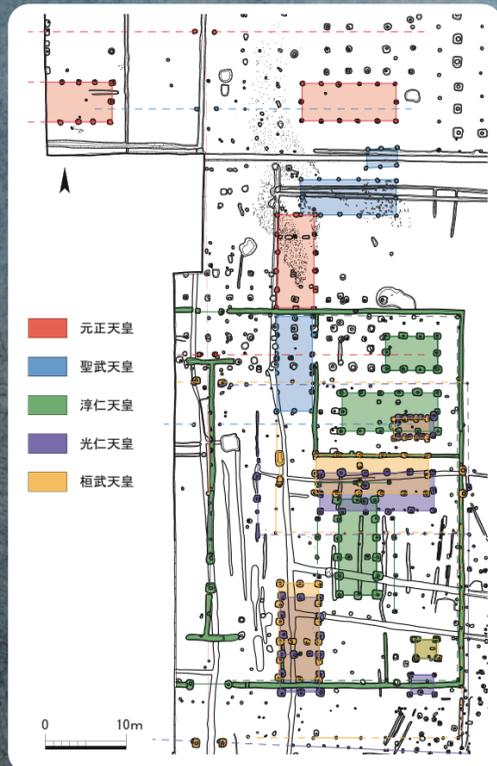
平城宮の大嘗宮遺構の規模と建物配置の変遷



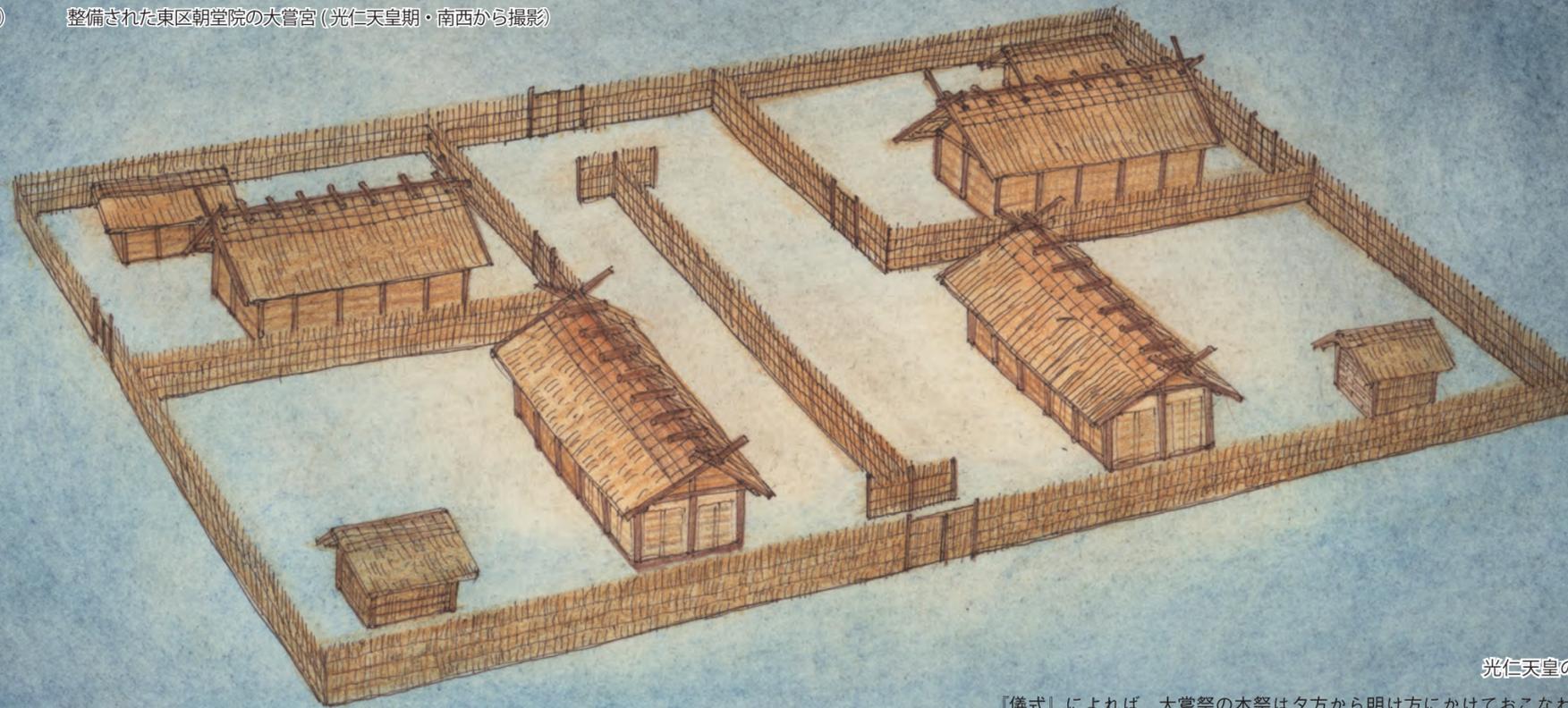
東区朝堂院でみつかった大嘗宮の遺構(南東から撮影)



整備された東区朝堂院の大嘗宮(光仁天皇期・南西から撮影)



東区朝堂院でみつかった大嘗宮の遺構平面図



光仁天皇の大嘗宮(イラスト:早川和子)

『儀式』によれば、大嘗祭の本祭は夕方から明け方にかけておこなわれています。また大嘗宮の各建物は、皮付きの丸太を用いる黒木造の掘立柱建物で、壁は草を芯として蓆を重ねて造っていました。屋根は茅葺で、正殿や膳屋には千木と堅魚木を設けていました。このイラストは、上記の平安時代の形式が、奈良時代から継承されたものであると想定して作成しました。

